
心のうちに潜むもの

あおつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心のうちに潜むもの

【Nコード】

N2948G

【作者名】

あおつき

【あらすじ】

周りと違う考えを抱きながら生活している少女が、とあることをきっかけに変わっていくお話。

私はどのような最期を遂げるのだろうか。そんな風に考える事が、時たまある。その時は

決まって、誰にも知られずにひっそりと、異常者に原型を留めない位ばらばらにされ死んで

いる自分の姿を想像する。こんな事を、家族や友達に話すことはま
ずない。というより、

話したところで普段の私を見ているものは、冗談だとは思わない
だろう。

普段の私。客観的にみれば、単なる優等生で、これと言った個性
もなく友達もそれなりに

いる。けれど、それは本当の私ではない。自分ひとりでいるときと、
友達や家族の前での私は

全然違う。本当の私を、段の生活の中で露呈していれば、友達は離
れていだろうし、家族に

いたっては私の異常さに驚いて精神科に私を連れて行くかもしれな
い。はつきり言ってしまう

えば、友達も家族も私にとってはどうでもいい存在なのだ、私の事
をどう認識しようが、

私の知ったところではない。家族との関係も友達との詰まらないや
り取りにも、私は飽き飽き

していた、毎日の同じようなやり取り。刺激のない生活。幸い私は
自分を偽ることも、愛想笑い

をすることもが得意であったから、人間関係においては17年間上
手くやってきた。

けれどこのまま刺激のない日々を偽りにまみれた自分で生きていく
のならば、死んでしまった

方がまし、と中学に入った辺りから思うようになっていた、なぜそ

のように考えるようになったのかは自分でもわからない。ただ、「死」と言うものに対しての興味が自分の中で大きくなっている事だけは自覚することができる、自分の死に様を想像するようになったのも、そのころからだ

無論、自分だけでなく他人の死体にも興味が沸くようになっていた。「死」と言うものに興味を持てば、死体とか、そういった類のものに興味が沸くのは当然、けれど自分を殺したいと私は思っている。そう思うことが異常であるという自覚は勿論ある、けれども自分で自分を殺している状況や、自分が誰かに殺されている場面を想像すると、決まって私は笑みを浮かべている。そういった事を考えるのが凄く楽しいのだ。一人でいるときは、いつもそんな事ばかり考えて笑みを浮かべている。それが本当の私、学校や家庭での私は、偽りの私に他ならない。

退屈な授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。今まで授業をしていた教師は適当に授業を切り上げ、教室から立ち去った。とたんに教室は喧騒に包まれる、私が帰り支度をしていると、一人のクラスメイトが話しかけてきた。彼女とは表面上仲良くしているので、向こうからはよく話しかけてくる事が多いが、私から話しかける事はまずない。向こうは私に関心があるようだが、私が彼女に興味を抱く事はない。唯一興味があるとすればそれは彼

女の死んだ姿ぐらいだ。目の

前で、そんな事を口にするのは一切ない。変に目だつてしまうと面倒臭いからだ、それに個性

のない生徒として埋没しているほうが、退屈ではあるけど私は気楽に過ごせる。彼女との話の内

容は、一緒に帰ろうとか、そう言う類のものであった、普段なら断る事はないのだが今日はなん

となく一人で帰りたいと思ったので断った。

「今日はちよつと、忙しいから」

「珍しいね、あなたが断る事って滅多にないのに。それじゃまた明日ね」

「うん、またね」

適当に返事をして、会話を終わらせる。彼女は何人かの集団で教室から出ていった。教室が

混み合っているのが煩わしいので、私はみんなが去った後一人で教室を出た。他の教室はとつく

に授業が終わっているらしく、教室の中に生徒は一人もいない、廊下にちらほらと残っている

生徒がいるだけだ。途中すれ違った教師に挨拶をかわして、私はその場から去った。いつもと

同じ時間に、いつもと同じ道を通って帰る、この日違ったのはいつも一緒にいる生徒がいない

だけである。それでも違和感は一切感じなかった、大人数で帰っていても、周りの事なんて紙の

ようにしか思っていないかったから、適当に相槌を打ったり、作り笑いをしてその場しのぎを

続けてきた私にとって、一人帰るのも集団で帰るのも煩わしいものが無いだけで、大差はないのだ。

いつもの道があるいていると、唐突に声をかけられた。見覚えのある制服を着ているから同じ

学校の男子生徒である事は分かったが、見覚えのある顔ではなかった。

「初めまして。いつも声をかけようと思っていたんだけど、君はいつも女子の集団の真ん中に

いるから、声をかけられなかったんだ」

「いきなり何？」

私はぶっきらぼうに返事をした

「ん、君と少し話がしたくってね」

男子生徒に対する警戒は解かずに私は尋ねる

「話？すぐ終わるのならかまわないわ」

「ちよつと長い話になるかな、まあ君しだいだけど」

「私しだいって、どう言う事？」

「ん、まあ話を聞けば分かるんじゃないかな」

埒が明かないと判断した私は、話を聞くことにした。

「いいわよ、どうせ暇だから」

「おや・・・？教室で言っていた今日は忙しいって言うのは、嘘なんだ」

なぜ彼はそんな事を知っているのだろうか・・・、教室での会話を聞いていたとは思えない、

何せ彼とは今日始めて顔を合わせたのだから。疑問に思いつつも、私は彼に興味を持ち始めていた。

「・・・一人で帰ってたから適当に言い訳しただけよ」

なぜ知っているのかとか、そう言う事はあえて口に出さなかった

「ふん、でも、嘘をついた事に変わりはないだろ」

「そんなこと、どっちだっていいじゃないの」

焦らされている感じがして私はなんとなくはらがたってきた

「ん、今焦らされてるんじゃないかって思った？」

心の中をみすかされたようで、不思議だった。

「ええ、貴方って私の心のうちが読めているような事を言うのね、そんな事はどうだって

いいけど。話って何なの？」

「はは・・・、心のうちが読めるって？それはきつと気のせいだよ。」

彼はまた話をはぐらかそうとしている。

「話って、何なのですか？用が無いのなら、私帰りますよ？」

「おっと、悪かったね。まあ立ち話もなんだから、あそこで話しますか」

そう言うと、彼は公園のほうを指差しついてくるように言うと、公園のほうへ歩き出した。

あいているベンチを見つけると彼はそこに座った、隣に座るよう促したので、仕方なく私は

彼の隣に座った。私が座ったのを確認すると、彼は口を開いた。

「わざわざどうも。さて、本題に入るとしますか」

私は彼に対して警戒心むき出しであった。そんな私をよそに彼は話を始める。

「君はいつも、自分の死んだ姿とか、自分が誰かに殺害される状況とかを、想像して心の中で

微笑んでいないかい？心の中で微笑んでいるのは、学校にいるときや家族の前だと思うけど、

一人の時は笑みを浮かべているんじゃないかと、僕は思っている。

これは僕の憶測に過ぎない、

けど実際君はそう考えているかもしれない、もし本当にそう思っているのなら『うん』と、

違うのなら『違う』と、どちらかで答えてほしい」

何で彼はその事を知っているのだろう……、誰にも話した事はないのに口に出す事もないのに……。

私は、そんな彼を恐ろしいと思い始めていたが、その場から逃げる

ことはできなかった。

気持ちの悪い汗をじつとりとかいているのがわかる。そして私は答えた。

「うん……、でもなぜ……貴方はこの事を知っているのかしら？私には誰にも話した事が無いし、口に出したこともない、それなのになぜ知っているのかしら？」

彼は眉すら動かさずに答える

「本当に、そう思っていたのか。なぜ知っているのか、うーんそうだな。信じる、信じないは

君の勝手だけど、僕は他人の心の声が聞こえる。まあ、全て聞こえるというわけではないけど。

思いが強ければ強いほど心の声は聞こえるかな。でも、君の心の内は殆ど読めるようになって

しまったよ、同じ人の心の声を聞き続けると、思いの強さなんて関係なく、聞こえるようになるからね。」

そこまで知ってなぜ彼は、私に話しかけてきたのだろうか、そんな恐ろしい事を考えている私を

異常だと思わなかったのだろうか・・・、それとも単になれているだけなのだろうか……、彼が

なぜそんな事を私に話したのか、私は全く理解することができない。私は兎に角、彼が

怖かった、これ以上心の中を知られると言う恐怖からなのか、何なのかは全く分からないが、怖かった。

「君みたいな考えの人間は、極稀にいるが正直とても怖い。心の声が聞こえる人間にとっては特にね。思っていた事が聞こえるだけじゃなく、君が想像した映像までが、僕の脳にいきなり

飛び込んでくるんだからね。勿論心の準備なんてできるはずもない。

人の心の声が聞こえても、次に何を考えるかまでは分からないから。突然目の前に君のバラバラになった死体や、君が人を惨殺しているシーンが飛び込んでくる。何度も何度もそれを見せられたら、正気でいられるはずが無い」

彼の様子は先ほど顔を合わせたときとは全然違っていた。恐ろしい、私はそう感じて

逃げようとしたが、足が震えて全く動けなかった。彼はそんな私を無視して言葉を続ける。

「心の声が聞こえるのは僕だけじゃない、他にもたくさんいる。君のような考えをもっている人間の心の声を聞き続けて発狂してしまったものもいれば、自殺をしてしまったものもいる。幸い

そう言う考えを持っている人間は少ないし、ある共通の考えを持っているから。処分は楽なんだけどね。」

『処分』と言う単語が彼から発せられたのを聞いて、私は青くなつた、心の中は彼の前から逃げたいと言う気持ちが溢れかえっている。今は死への興味なんか、微塵もない。

「これは決められたことだから、君は逃げることも、避ける事もできないよ。あ、言い忘れていたけど、僕は心の声を聞く以外にもできる事がある、今の君なら分かるよね」

逃げたいと思ってても体は全く動かなかった、動かそうとしてもものすごい重さの錘をつけたように、全身がけだるい。こうなっている原因はきっと彼の力によるものなのだ。私にはどうすることもできない、そう思った瞬間、私は生きる事をあきらめていた。

「やっと、あきらめたようだね……。僕だつてこういう真似はしたくないが、君のせいで

僕の大切な友達が自殺してしまったんだ…、君のような考えの人間は『処分』する、と言う

決まりだから僕はどうすることもできない。それに僕も君に大分苦しめられたよ……。もう、

我慢の限界なんだ。だから今日君の心を操作して、一人で帰るように仕組んだ。『今日はちよつと

忙しいから』あれは僕が君に言わせた言葉だよ…。」

彼は殺意に満ちた目でそう語っている。

「君みたいな危険な人間は、『処分』する。なるべくならこういう形はとりたくなかった、

でも無理なんだ……。さよなら」

次の瞬間、私は無残な死体となっていた……。どうしてこんな事になってしまったのだろう……

あまりの理不尽さに、私は泣きたかった。けれど……。泣く事はもうできなかった、涙を流すこ

ともできなかった。死にたい……。死に対する実感がなかった私は、自殺したいと考えていた。

だが、こんな形で命を失おうとは想像していなかった、いや想像できるはずが無い。現実的には

ありえない存在に、私は殺されたのだから。

ふと、疑問に思った私は死んだはずなのに、何故自分の死体を目の前にしているのかと……。

私はまだ公園にいる……。隣を見ると彼がたっていた。そして私に話しかけてきた。

「どうだった？僕の見せた映像は？なかなか怖かっただろ？」

私は彼の言っている事が全く理解できない…。

「えっと…、処分って…貴方はいつたい私に何をしたの？私は死んだのではないの？」

私は困惑した瞳で彼を見つめている

「ん…、処分って言うのは、僕らが君に見せられた物を、恐怖のどん底に突き落とした上でいきなり見せるというものだよ。相当怖かっただろ？」

私は自分が無事でいられたことを知って、安堵した。そして、死と言うものがどれほど

怖いものなのかを実感させられて、死への興味は一切なくなっていた。けれどまだ、全身の

震えはとまっていない。

「う、うん…。凄く怖かった…」

「僕はね、毎日のようにあれを見ていたんだ、どれほど辛いか分かったよね？また君がそういう

終え恐ろしい考えをしていたら、次は本当に『処分』するからね。」

彼は優しい声で言った、先ほどの殺意に満ちた目はしていない、そんな彼を見て私の震えは

いつの間にか止まっていた。彼は続ける

「僕の他にも、心の声が聞こえる人間はたくさんいるのだからね…、君もしばらくは同じ境遇を

味わうことになるだろうけど、死ぬよりはましだろ？」

命が助かっただけで私は満足だった、だから彼にこう告げた。

「本当にごめんなさい、今まで恐ろしい思いをさせてしまつて」

「なに…、君の恐怖に比べたら微々たる物さ、僕らは慣れているから、君もがんばれよ

一週間で元には戻るけど、心の声が聞こえるのは、君が思っているほど楽ではないのだから…ね」

彼は複雑な表情でそう言うと、寂しそうに去っていった。

公園から家に帰るまでの記憶は、よく覚えていない…。気づいたら家の玄関の前にいた、

まだ日は暮れていなかったから、いつも通り帰ってこられたのだと私は安堵した。私は玄関のドアを開けた。

「ただいま」

「あら、お帰りなさい。今日は早かったのね」

その時母の心の声が聞こえた、今日も無事に帰ってきてくれて良かった、と。

私は自分が愛されているのだなと実感した。そして忘れていた家族の大切さを思い出して

涙をこぼしていた。そんな私を母は抱きしめてくれた。私はしばらく母の胸の中で泣いていた。

「どうしたの……？いきなり泣き出して？」

「ううん、なんでもない。今まで、ごめんなさい」

母は怪訝そうな表情で私を見ていたがそんなことは気にしなかった。

もう二度と、自殺したいなどと私は思わないだろう。心の声が聞こえる状態で一週間過ごした

私は、何も無い平凡な日常がどれだけ大切かをかみしめていた。自分に関心を示してくれていた

友人を今はとても大切にしている。あの日彼に会わなかったら今の私はなかっただろう、私は

心の中で「ありがとう」大きく叫んだ、きっと彼と会う事はもうないけど、私が彼の事を忘れる

事は一生ないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2948g/>

心のうちに潜むもの

2010年12月29日08時33分発行